

○主要年譜

- ・「齋藤利政」は、1536年、美濃守護代の齋藤利良が病死するとその名跡を継いで齋藤姓を名乗り、1541年、美濃守・土岐頼芸(ヨリノ)の弟・頼満を毒殺して1542年には頼芸を尾張へ追放し、事実上の美濃国主となった。(僧侶、油商人から戦国大名にまで成り上がったされるが、不詳) 1547年、美濃の稲葉山城攻めを仕掛けた織田信秀と和睦した利政は、娘の帰蝶を信秀の嫡子・織田信長に嫁がせた。(この際、利政は、「うつけ者」と評されていた信長が多数の鉄砲を護衛に装備させ正装で訪れたことに大変驚き、「我が子たちはあのうつけ(信長)の門前に馬をつなぐよう(家来)になる」と家臣に述べたとされる。
- ・1554年、齋藤利政は家督を子の齋藤義龍へ譲り、剃髪して「道三」と号したが、義龍よりも弟の孫四郎や喜平次らを偏愛していたため、義龍は弟達を殺害して道三と対峙することとなり、1556年に親子が対決(「長良川の戦い」)して、道三は戦死した。信長は援軍を出すも間に合わず。(義龍は、親殺しの汚名を拭うため「齋藤姓」を捨てて「一色姓」を名乗り、美濃守護代にあるも、1561年に35才で病死。そのあとを息子・龍興が継ぐが、最後は織田との戦いで戦死。)
- ・この戦いで、光秀は、道三方にあったが難を逃れ、越前の朝倉義景を頼って美濃を去る。越前での生活は、楽でなかったようで、連歌会の催しを担当することになった時など酒宴の用意に苦労する光秀をみかねた妻・熙子は、自分の黒髪を売ることによって費用を工面したと伝わる
- ・最も有力な味方の道三を失った信長に対し、織田家では、柴田勝家・林秀貞(通勝)らが信長の弟・信勝を擁立して挙兵する<稲生の戦い=1556年>が、結果は信長の勝利に終わり、母・土田御前の仲介によって信勝・勝家らは赦免された。しかし、柴田勝家の密告で、信勝が再び謀反を企てていることを知った信長は、病と称して信勝を清洲城に誘い出し殺害した。(1558年)
- ・1560年、今川義元が大軍で尾張国へ侵攻したのに対し、信長は、今川軍の陣中に強襲をかけて義元を討ち取る。<桶狭間の戦い>
この時、松平元信(のちの徳川家康)は、今川軍にあったが、途中、今川軍が放棄した岡崎城に入ってから独自の軍事行動をとり、戦いのあと、1562年には今川氏と断交して信長と同盟を結んだ<清洲同盟>。
「竹千代 → 元信 → 元康 → 家康」
 - ・数え6歳の時、母の兄が織田氏と同盟したため、敵対する今川氏の庇護を受けていた父・松平広忠(岡崎城主)は、妻を離縁し嫡男・竹千代を今川に人質とした。
 - 護送の途中、故あって尾張の織田信秀の許へ送られたが、2年後に広忠が亡くなったため、今川義元は信秀の庶長子・織田信広との人質交換によって竹千代を手許に引取って元服させて元信と名乗らせ、義元の姪(のち築山殿)を娶らせた。のちに元康 → 家康と改名。
- ・清洲同盟のあと信長は、本拠を小牧山城に移し、犬山城を攻略して尾張統一を達成するとともに、甲斐の武田信玄の4男・勝頼に対して養女(龍勝寺殿)を娶らせ、同盟を結ぶ。
- ・1565年、第13代将軍・足利義輝が暗殺される<永禄の政変=三好三人衆・松永久通らが襲撃>その後継を巡り、三好三人衆が支援する義親(義栄)と朝倉義景が支援する義昭(義秋=義輝の弟)が争い、義親が一旦、将軍宣下(14代)を受けるも、最後に義昭を支援した織田信長の働きで義昭が第15代将軍に就任する。(三好義継と松永久秀も従う。) … 1568年
- ・足利義昭は、兄・義輝が暗殺された時は僧籍(覚慶)にあつて捕縛されたが、松永久秀の保護を得ていることから殺害を免れ、義輝の側近・一色藤長、三淵藤英、細川藤孝らに救出されて一旦甲賀に身を置き、足利将軍家の当主になる事を宣言した。1566年、還俗して足利義秋と名乗り、信長に上洛の協力を求める一方、三好三人衆の襲撃を恐れて越前国の朝倉義景のもとに身を寄せて、上洛の機会を窺う。
ここで、光秀と義昭は接触を持つことになる。義景が、義昭からの上洛要請に対して動こうとしない状況の中で、光秀から「義景は頼りにならないが、信長は頼りがいのある男だ」との勸

めを受け、1568年に義昭は、斎藤氏から美濃を奪取した信長に対し、“上洛して自分を征夷大將軍につけるよう”にと、光秀を通じて要請した。同年7月、義昭は一乗谷を出て岐阜城下で信長と会見し、9月に信長は足利義昭を奉戴して上洛を開始した。光秀も随伴している。

上洛した義昭に対し、三好三人衆がその宿所「本圀寺」を急襲<本圀寺の変=1569>するが、光秀らがこれを鎮静化する。その後光秀は、木下秀吉・丹羽長秀・中川重政と共に信長が支配下に置いた京都と周辺治安を担い、事実上の京都奉行の職務を行う。

・しかし、同年10月、信長と義昭が意見の食い違いで衝突し、信長が突如として岐阜に戻ってしまうが、翌年正月には信長名で、「禁裏と將軍御用と天下静謐のために信長が上洛するので、共に礼を尽くすため上洛せよ」との触れが全国の大名に出され、3月に上洛した信長に対して朝廷から“天下静謐執行権”が与えられる。

・1570年に信長が朝倉義景を襲撃した<金ヶ崎(敦賀)の戦い>では、浅井長政の裏切りにあつて信長軍は撤退するが、光秀は木下秀吉・池田勝正らと(シガリ)を務めて功を挙げた。

1571年の石山本願寺拳兵時にも、光秀は、信長と義昭に従軍して大坂に出陣、さらに同年の比叡山焼き討ちでも光秀は、武功を上げて近江・滋賀郡を与えられ坂本城築城にとりかかる。このあと、光秀が旧延暦寺領を押領したと義昭の怒りを買ったことに対して、光秀は「先の見込みがない」と義昭に暇願いを出し不許可となるも、これを機に義昭と袂を分かちつ。

・1572年、信長が義昭に“17条の意見書”を突きつけたことから、義昭は浅井長政・朝倉義景・石山本願寺などを扇動し「信長包囲網」を築く。武田信玄もこれに加わるが1573年死去する。

・1573年、義昭が拳兵したのに対し、信長軍は柴田勝家・明智光秀・丹羽長秀らを中心に、まず石山砦を、次いで堅田砦を攻撃(光秀は湖上から船で)し勝利した。<今堅田・石山の戦い>信長は將軍を重んじ義昭との講和交渉を進めるが成立寸前で、松永久秀の妨害で破綻したことから、義昭が再び宇治・槇島城で拳兵したのに対し、光秀も信長軍として従軍した。この戦い(1573年2~7月)で義昭は降伏し、追放されたことによって、室町幕府は事実上滅亡した。

・同年8月、信長は近江に攻め入り浅井(アサイ)長政の小谷城を包囲。これに朝倉義景が長政の援軍に出向くも軍内の乱れもあつて一乗谷に帰還の止む無きに至り、信長軍の追討にあつて義景は自刃する。さらに、北近江に引き返した信長軍の総攻撃で長政も小谷城で自害する。

<小谷城・一乗谷の戦い> 戦いのあと、光秀・秀吉・滝川一益の3人は戦後処理として、北の庄城(福井市)に2~3ヶ月滞在している。

長政の嫡男と正室・お市の方(信長の妹)、娘3姉妹(茶々、初、江)は、秀吉に引き渡され、その後、柴田勝家の許に嫁ぐ。(嫡男は磔刑)

・1575年、信長・家康連合軍と武田勝頼が、三河国・長篠城(現・愛知県新城市)を巡って戦つた<長篠の戦い>。この戦いは連合軍の鉄砲隊と武田騎馬隊との戦いとしても知られる。

なお、光秀は、この戦いに参戦説と不参戦との両説がある。

「丹波国征討戦」

・同年の越前一向一揆を鎮圧して一旦坂本城に帰還した光秀は、信長から親「義昭」派である丹波攻略の総大将を任される。

光秀は黒井城(現・丹波市)の赤井(萩野)直正を攻めて追い詰めるが、波多野秀治の裏切りで背後から攻撃されて敗走せざるを得なくなる。(1575/10~1576/1)

・少し間をおいて、1578年10月、光秀は第2次丹波征討に向い、亀岡に亀山城を築いて本拠地

とした。この戦いでは、黒井城を一挙に攻めず、八上城(篠山)ら廻りの支城を包囲して連絡路を絶つ作戦をたて細川藤孝・忠興父子、羽柴秀長、明智秀満の援軍も得て、翌年8月に黒井城を落城させて、ほぼ丹波を平定し、さらに細川藤孝と協力して丹後国も平定する。

なお、この戦いで、兵糧攻めにしていた八上城を開城させるため、光秀は、城主の波多野秀治に”一族の命を保証するとともに光秀の母・お牧を人質に出す”ことを提案し、これに応じた秀治は降伏して安土に送られたが、信長は兄弟3人を含め秀治を磔に処した。それを知った八上城の家臣達はお牧を磔にしたとされる。(ただし、俗説) ⑨ のち、明智(現・恵那市)に”お牧の墓”が造られている。

・丹波平定によって、光秀は丹波を、細川藤孝には丹後が与えられており、光秀は福知山城を築城(1579年)して、娘婿の明智秀満(光春)を城代に置いた。

(この結果、光秀の近江から山陰へ向けた畿内方面軍が成立する。)

・また、光秀は、第1次丹波征討戦(敗走して坂本城に帰還)のあと、1576年には石山本願寺との”天王寺の戦い”にも出動するが、過労で倒れてしばらく療養を続けており、同年11月には、病気になった正室の熙子が坂本城で急死している。

1577年には、”雑賀攻め”(本願寺派の雑賀衆)及び”信貴山城の松永久秀討伐戦”に参戦。

「本能寺の変」＝ 天正10年(1582)6月2日早朝

<前夜までのいきさつ>

・1582年5月14日に、光秀は信長から武田氏との戦で功があった徳川家康の饗応役を命じられてその役を務めていたが、17日には急遽、光秀と与力衆(細川藤孝・池田恒興・高山右近ら)に毛利征伐にある秀吉への援軍の先陣を務めるよう命じられた。光秀は坂本城に戻って出陣の準備を行い、5月26日亀岡の丹波亀山城に移った。(この際、愛宕山の愛宕権現に参拝し、そのあと軍備を運ぶ輜重隊を西国へ先発させたとされる。)

・6月1日、光秀は1万3千人の手勢を率いて丹波亀山城を出陣するが、途中で軍議(娘婿の秀満・光忠、斎藤利三、藤田伝吾ら5人)を開き、初めて”信長討伐”の意を告げた。

(家臣の『本城惣右衛門覚書』によれば、”雑兵は信長討伐という目的を最後まで知らされず、本城も、信長の命令で徳川家康を討つのだと思っていた。”と記されている。)

軍勢には「森蘭丸(信長の小姓)から使いがあり、信長が明智軍の陣容・軍装を検分したいとのことだ」として、桂川を越え、6月2日の早朝には本能寺に到着した。

”敵は本能寺にあり!”の話が有名であるが、これは『明智軍記』にあるもので俗説だとされる。

・一方、信長は、5月19日に安土で、家康、近衛前久(サキヒサ)、穴山梅雪(軍師)、松井友閑らを舞や能でもてなしたあと、家康と梅雪を京・堺の見物に送り出した。29日には、「戦陣の用意をして待機、命令あり次第出陣せよ。」と命じて上洛し、6月1日に前久や公卿・僧侶ら40名を招いて本能寺で名物(茶器)披露の茶会を開いている。

<その日の顛末>

・6月2日早朝、本能寺を包囲した光秀軍が関(トキ)の声を上げて、御殿に鉄砲を撃ち込んできたのに対し、信長は「さては謀反だな、誰のしわざか」と、蘭丸に物見に行かせたところ「明智の軍勢と見受けます」との報告に、信長は「やむおえぬ(是非に及ばず)」と答えたといわれる。

100人足らずの近習達は奮戦するも次々に討死し、信長は初め弓を持って、次に槍を取って戦うも右肘に槍傷を受け、火も迫ってきたため殿中の奥深くに籠り、納戸を締めて切腹した。

戦いのあと、明智勢は信長の遺体をしばらく探したが見つけれなかった。このことは、その後の光秀の立場にかなりのマイナスとなった。

・信長の嫡男・信忠は宿泊していた妙覚寺から二条御新造に移って追撃してきた光秀軍に抗戦したが、まもなく火を放って自刃した。(信忠は信長を追って上洛していた)

・変の後、光秀・4女の婿である織田信澄は、信長の弟の子で信長の右腕的存在(側近)であったが、”信長殺害を光秀と共謀した”との説が広まり、織田信孝(信長・3男)と丹羽長秀によって大坂・福島の野田城において殺害されている。

<参考>

この時の織田勢の主な武将の動静

羽柴秀吉＝中国攻め。柴田勝家＝越中魚津城で上杉勢と交戦。滝川一益＝上野国で北条勢を牽制。織田信孝・丹羽長秀＝堺で家康を饗応し、四国征伐軍編成中。徳川家康＝信長から饗応され、近習と堺を見物中(帰国途路の飯盛山付近で凶報に接する)。

・光秀は京都を押さえると、信長・信忠父子の残党追捕を行って坂本城から安土城に入り、近江平定を行った。(安土城では、信長貯蔵の金銀財宝や名物を自分の家臣や味方に与えている)その後、市中の混乱警護のため京に入り、朝廷と勅使の吉田兼見や京都五山・大徳寺に銀を献上した。

・また、光秀は、娘(3女)・玉の夫である細川忠興とその父・藤孝(幽斎)親子を味方に誘ったが、細川父子は信長の喪に服す事を表明し剃髪することで、これを拒否し、玉を幽閉した。

このことは、その後の光秀の滅亡を決定的にしたともいわれる。

(玉(のちガラシャ)と細川忠興は、1578年に信長の仲介で勝龍寺城で結婚＝政略結婚)

「”山崎の戦い”とその後」… 1582年6月13日(「天下分け目の天王山」)

・中国攻めで備中高松城にいた秀吉は、この報を聞いて急遽毛利氏と和睦を結び、11日後に引き返してきた(”中国大返し”)ため、光秀は天王山の麓の山崎でこれを迎え撃った。

秀吉軍は2万7千人、光秀軍は1万7千人とされるが、秀吉軍は疲弊しており、この地は天王山と淀川の間で狭い地域であることから戦況は予断を許さなかったが、秀吉軍の優勢で展開した。

(光秀は摂津衆の高山右近や大和一国を支配する筒井順慶らを味方に引き入れようとしたが、二人が秀吉方についたことは、光秀の誤算であった)

・劣勢にたった光秀は、本陣の勝龍寺城から坂本城を目指して落ち延びる途中、落ち武者狩りの百姓に竹槍で刺されて深手を負ったため家臣・溝尾茂朝に介錯させて自害し、その首を近くの竹藪の溝に隠したとされる。(一説では、小栗栖(現・京都市伏見区)において落ち武者狩りに殺害されたとも、致命傷を受けて自害したともされる。)

・光秀の首は発見した百姓により翌日、村井清三を通じて信孝の元に届き、本能寺で晒された後、同月17日に捕まり斬首された斎藤利三の屍とともに京都の栗田口で晒されたとされており、両名の首塚が栗田口の東の路地の北に築かれている。

・安土城で留守を守っていた明智秀満は、急遽、出兵するが天津で迎え撃ちにあつて坂本城へ敗走し、光秀が集めた財宝の目録を添えて包囲軍に渡した後、城に火を放って自害した。

また、亀山城にいた光秀の息子・光慶は、高山右近らの攻撃に合い自刃した。

<参考:「四国攻め」>

・1575年、土佐を平定した長宗我部元親は、信長に”長男の烏帽子親”を頼み、元親が阿波平定する際に三好康長が敵対しないよう説得を依頼したのに対し、信長は「四国は切り取り次第所領にしてよい」旨の朱印状を渡した。光秀が信長と元親との仲介を取り持った。

・しかしながら、その後に信長は、元親に対して土佐及び阿波南半分の領有のみを許し、他の占領地は返還するよう命じたことから、元親は反目し、さらに元親が中国地方の毛利氏と協調関係にあったことから、二人の対立は深まっていった。

1582年5月上旬、信長は3男の信孝を総大将、丹羽長秀・津田信澄らを副将として四国攻めを指示した。信孝軍は軍備を整え、6月2日に出立することになっていたが、その日に起こった”本能寺の変”のため中止となっている。

・四国との同盟関係を期していた光秀は、信長のこの決定に強い不満を抱いたとされ、変に至った要因のひとつとする説もある。

(2014年に、元親が斎藤利三(道三の娘婿で光秀の重臣)にあてて、「四国の領土をめぐり、信長の命令に従う」との意向を示した手紙 —1582年5月21日付— が発見されたことから、この考え方が唱えられている。)

<参考:「本能寺の変」の要因諸説>

①「野望説」= ”天下を取りたい”という光秀の野望。… ”麒麟” を目指した？

②「怨恨説」= ”信長が光秀に加えた度重なる理不尽な行為” が要因。

「不安説(焦慮説/窮鼠説)」= 自衛のための謀反(頼山陽)… 本質は①②と同じ。

③「黒幕(主犯)別在説」、「共謀説」… ①・②の”光秀単独犯説”に相対する説

・朝廷黒幕説(朝廷関与説)。 ・足利義昭黒幕説。

さらに、・秀吉黒幕説。 ・光秀・秀吉・家康の三者共謀説。 も

”このドラマでの「麒麟」とは、誰を示唆しているのか！” (“結局、麒麟はこなかった”?)

それとも、「麒麟がくる”ことを信じて戦い抜いた”夜明け前”の戦国武士達”の意か！



「山崎古戦場」



明智光秀の像(坂本城址公園内)